

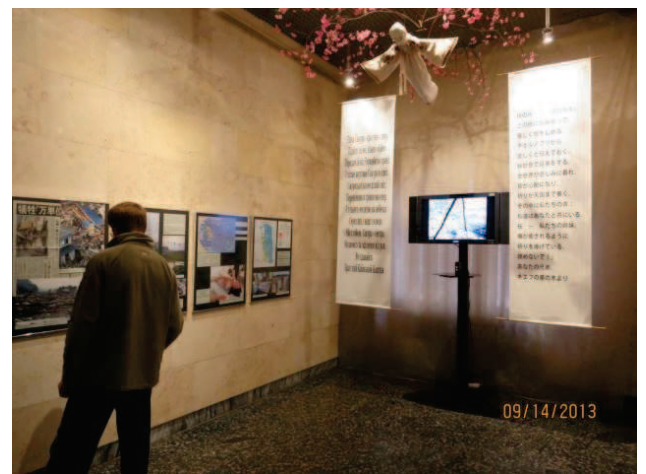
\*「ポレーシェ」とは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう



## 「諦めないで！」私たちはあなたとともにいる

ウクライナ国立チェルノブイリ博物館

桜の枝 - 煙の美女。  
この枝に歩み寄って、優しく抱きしめる。  
チェルノブイリからよろしくと伝えておく。  
桜が息で返事をする。  
全世界が悲しみに暮れ、  
皆が心配になり、祈りが天国まで響く。  
その中に私たちの声：  
私達はあなたとともにいる。  
桜 - 私たちの姉妹。  
傷が癒されるように祈りを捧げている。「諦めないで！」  
あなたの兄弟、キエフの栗の木(カシタン)より



<国立チェルノブイリ博物館で  
「フクシマ展」開催中(2013.9.14 キエフ)>

スタディーツアーに参加した私たちは、9月14日に、今回の企画のハイライトの一つ、「チェルノブイリ博物館(キエフ)」で開催中の「フクシマ展」を訪れた。会場には、冒頭の福島に捧げられた「詩」が掲げられている。そして、そのすぐ左横の特等席(!)に、チェル救の「放射線量率マップ」が、世界デビューを果たしていた。

栗の木(カシタン)の街路樹は、キエフ市の象徴だ。チェルノブイリ原発事故を体験したウクライナ。キエフから福島へと、心からの励ましの言葉が届けられている。

場内には、「フクシマ」の個人や団体から提供された120枚以上の写真が展示され、その1点1点が世界の人々に語りかけている。博物館を訪れ、この展示を見る私たち日本人の心には、感謝の気持ちがこみ上げてくる。どんなニュースよりも、1枚の写真がとらえた真実の力は大きい。

この企画を知り、この展示会に参加して良かった。今回の訪問がこの時で良かった。(美)

〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞 3-8-10 愛知労働文化センター B1

**NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部**

銀行 名：三菱東京UFJ銀行 名古屋営業部 (店番号 150)

口座番号：普通 6949211

口座名義：特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部 理事長 原 富男

郵便振替：00880-7-108610

TEL / Fax：052-732-7172 (月・水・金 10:00 ~ 17:00)

ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>



チェルノブイリ救援中部

## 9月ウクライナ訪問団報告 2013年度の課題

9月10日から9日間、秋のウクライナ訪問団として出かけました。

現地の様子、変化などをかいつまんで報告します。

今年度に予定していた、ナロジチ住民による「菜の花プロジェクト」(500ha)は、汚染地にナタネとミスカントゥスを栽培し、「除染と農業復興」を計るものです。

ジトーミル州は既に、この計画に資金50万グリブナ(約500万円)の拠出を決定していますが、入札事務が煩雑なため、残念ながら8月の播種に間に合わない事態になっています。そのため、今年の播種を断念し、一年延期することになりました。

州予算が付いたものの、用途は肥料・種子・作業代であり、日本側に申請している「草の根無償資金協力」でのコンバイン購入費用がなければ、プロジェクトの全体の進行は難しい状態です。この結果は11月末までに判明しますが、気の揉めることです。

救援・中部の支援している**事故処理作業者の団体**のうち「**障害者基金(96名)**」は、光熱費などが払えないため、現在事務所がない状態です。平均年齢も60歳となり、年齢を重ねるにつれ3級から2級、2級から1級へと障害程度が悪化し、今まで動いていた人が寝つくこともあるそうです。事故処理作業員一人に対する国の治療費は、年間で26グリブナ(260円)となっているとのこと。



<市民会議が州に要望している多数の要請書ファイル(アントニューク氏)>

二つ目の「**リクビダートル(150名)**」は、今年8名が亡くなり10人が加入した。代表が州の機関である市民会議のメンバーでもあり、これまで被災者に出ていることになっていた、がん治療費や保養券が、実は出ていなかったことに対して当局を追及し、使えるようにしたそうです。保養期間は、子ども30日間、大人18日間。がん患者が増えており、CTスキャン検査料が高いため、CTスキャンの導入について協力を要請されました。

**ナロジチ病院**では、最近保健所の監査が入り、「各診察室に手洗いシャワーなどが必要」との指摘を受けた。地区出身国会議員に頼み、改修資金の一部を出してもらうことができた

が、指摘に従えば、今後15万グリブナ(約150万円)足りない。また、今年から医療改革が始まり、州立病院・地区病院・地区診療所という従来の形が変わり、「いくつかの地区病院の中から拠点病院をつくり、地区病院の役割を減らす」という合理化が進むとのこと。一方では、団体の事務所さえ持てないグループがある中で、国や州当局と交渉して状況を改善しているグループもあり、従来に比べれば一歩前進した動きが出始めたと感じました。(原 富男)

### \*\*\*ナロジチ地区行政 ホーミン副行政長(チェルノブイリ担当)から伺ったお話\*\*\*

ナロジチ地区内の放射線量再調査が行われた。第1段階は終り、第2段階は10月から始まる。今回の調査結果で、第3ゾーンになると期待している。以前、第2ゾーンにある地区病院は閉鎖される可能性もあったが、事故後25~6年経ち、2013年に改修予算(100万グリブナ)がついた。地区病院は、上下水道と保温のための窓枠改修工事を行っている。2年前から実施したかったが、工事費がなかった。国会議員がサポートして予算が付いたので、2014年にさらに「地区内の高校・水道配管・村の診療所・3つの学校・中断していた4階建てアパート」などの改修工事を進めるとのこと。(スタツア・美)



<ますます老朽化が進む4号炉

(2013.9.16)>

## 9月訪問報告

今回、私は別件の通訳で9月4日からキエフにおり、11日夜に到着した原さんと合流、翌日からの派遣団日程に入りました。

ジトーミルのホステージ基金事務所では、亡くなられたキリチャンスキー氏の机に鉢植えが飾られ、今も空席となっているのに胸を打たれる思いでした。長年の重責を果たしてきた彼の存在の大きさを改めて感じました。しかし彼の跡を継いだドンチェヴァ氏が、従来の明朗さを失わないまま、てきぱきと職務を果たしているのは頼もしい限りでした。我々にお馴染みの元消防局長アントニーク氏が、ジトーミル州内の市民団体を束ねる「市民会議」の代表となり、同会議のチェルノブイリ問題委員会委員長のコヴァルチュク氏(「リクヴィダートル」基金代表)とともに、精力的な活動を始めている様子も見てきました。今後の成果に期待したいところです。

ナタネプロジェクトの協力者、ジトーミル農業生態学大学のディードゥフ准教授は、スイスの大学との来春からの「汚染地域共同研究プロジェクト」を抱えており、この夏その打ち合わせのため、愛車でスイスまで走ってきたそうです。14日のナロジチ地区訪問後、ジトーミルまで彼の車で送ってもらう途中、コーラステンでは「デルヌィ祭り」が行われていました。デルヌィとは、じゃがいもをすりおろしたものに小麦粉や卵を混ぜ、フライパンで焼く料理です。昔からの祭りというわけではなく、比較的最近始まったようで、町の公園の入口近くに、世界で唯一というデルヌィの記念碑(?)があります。ちょうど肌寒い気候の中雨が降っており、お祭り日和ではありませんでしたが、原さん、私、ドンチェヴァ氏とディードゥフ氏は車を降り、歩行者天国の屋台でデルヌィと串焼の肉を食べ、遅い昼食に代えました。仕事の合間のこんなちょっとした楽しみも、長年仕事の苦勞をともにしてきた気の置けない仲間であればこそです。(竹内 高明)

## クリスマスカードキャンペーン&ミルクキャンペーン スタート!!

ようやく秋の気配がしてきたかな・・・という今日この頃。

クリスマスなんてまだ先!と置いていたら、今年もまたこの季節がやってきました! 毎年このキャンペーンは名古屋NGOセンターのNたま生が担当してくれる目玉企画なのです。今年も10月から研修に来てくれることになりました(パチパチパチ)! 大学4年生の若きパワーで盛り上げてもらいます! みんなでサポートしながら進めて参りますので、皆様も応援してください。クリスマスカードは、今年もチェルノブイリと福島の子も達へ贈ります。「忘れないよ」「一緒にがんばろう」そんなメッセージを込めて、手作りのカードをお寄せください(キャンペーンの詳細は、同封のチラシをご覧ください)。そして、今年も久屋大通公園で**10月26、27日**に行われる「**ワールド・コラボ・フェスティバル 2013**」に**ブース出展**します。ここで、カード作りをします。東海地域のみならず、お友達やご家族を誘ってぜひ遊びに来てくださいね。



<おひさま幼稚園の子ども達(ナロジチ)>

そしてミルクキャンペーンも始まります(チラシもご覧ください)! チェルノブイリの子も達に汚染されていない粉ミルクを届けるキャンペーンです。事故から27年経った今でも、ナロジチ地区では安全な食品を手に入れるのが難しく、内部被ばくの状況が改善されていないのが現状です。そんな中、汚染された牛乳を飲まざるを得ない児童もたくさんいます。赤ちゃんだけでなく児童の栄養改善のためにも、このミルクキャンペーンは役立っています。

1人でも多くの子も達が支援を受けられるよう、皆様のご協力をよろしくお願い致します。(兼松)

## 南相馬便り (神谷 俊尚)

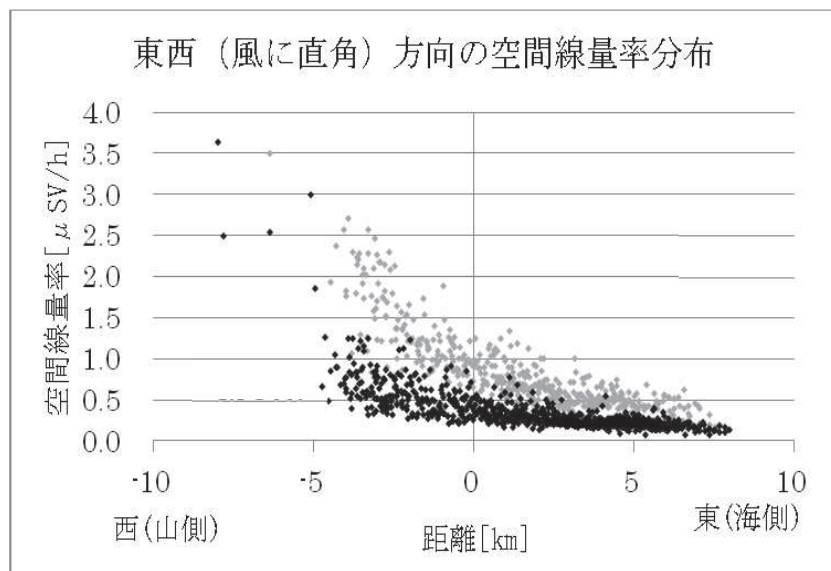
- ☆各地の市民測定所から、「今年に入り、検体依頼が急激に減ってきた」との声を聴きます。とどけ鳥は、冬場の季節的要因以外では、余り感じませんでした。6～8月の結果を見ると、確かに減少傾向が出ています。3ヶ月累計で、昨年度は1,185検体、今年度は789検体で前年比約33%減です。内訳は、食品関係約20%増、土壌約60%減、水約68%減です。土壌の減少と食品の増加とは関連性があります。既に土壌測定を終え、そこで栽培した野菜の汚染度合いが比較的良かったため、再度異なる作物栽培の測定結果を見て「食しよう」と考える方が増え、食品測定の増加に繋がっていると思われます。いずれにせよ「とどけ鳥」では、市民からの依頼検体に真摯に向き合いながら、息長く測定を続けることが使命だと考え、活動基盤の強化に努めていきたいと思えます。
- ☆「えこえね南相馬」が推進役として進めている、「ソーラーシェアリング」の1ヶ所(原町区太田地区内)が、多くのボランティアの協力を得て、9/1に開所しました。6反の畑に120枚のソーラーパネルが設置され、30Kwの発電能力があります。この場所を「再エネの里」として、再生可能エネルギー・農業・食育・文化・科学・除染など、総合的な学びの里に発展させていこうと考えています。その他5ヶ所の計画も、農業委員会に申請中で、許可が下り次第、順次設置工事に入る予定です。完成した太田地区のソーラーシェアリングの畑で、今秋、菜の花を播種する準備を進めています。
- ☆7月に収穫した菜種は、全体的には20kg袋で約200袋となりましたが、その処理に関しては、今年度は農家・収穫者それぞれが別々に行い、まとまった利用方法とはなりません。「菜の花プロジェクトネットワーク」が収穫したナタネから搾油した油を使い、年末に大規模なキャンドルサービスを実施する予定です。9/11に、とどけ鳥事務所で初めて、「菜の花打合せ会」が開催されました。参加者は、菜の花プロジェクトネットワーク(滋賀)・南相馬市回帰支援センター・南相馬市有機農家協議会・小高区農業復興組合・チェル救など、約15名です。今秋のなたね播種以降、共同で菜の花プロジェクトを推進していくと確認し合いました。また、初めて小高区から参加があり、播種用の種として今年収穫した菜種を分け合うとの確認もできました。しかし今後、収穫汎用コンバインの確保や搾油器の設置等々、問題は山積みです。「コンバインキャンペーン」への皆様のご協力を切にお願いします。小高区は10/6、その他は10月上旬に播種し、約10町歩で菜の花が咲き乱れる予定です。
- ☆第6期南相馬線量率マップの測定は、10月3・4週に実施します。今回も浪江町の測定を継続予定です。前回、南相馬市内の測定点見直し・増加を計ったので、今回は第5期と同じ地点の測定予定です(浪江町も変更なし)。
- 第5期参加者から、会津坂下町測定の協力要請があり、町の区割りをを行い地元の協力体制も整い、とどけ鳥事務所の応援で11月実施が決定しました。長期にわたる汚染調査、地域の人々が独自に測定し可視化するこの作業が、多くの市町村に広がる事を期待しています。
- ☆「汚染水」「除染」…問題山積みです。「問題なし」と、世界に大言壮語した安倍首相です。オリンピックと引き換えの国際公約を、きっちりと責任実行してもらいましょう。「除染」も相変わらず進んでいません。7月末、復興庁は「2012年度復興費9兆7,402億円のうち、3兆4,271億円(35.2%)が使われなかった」と発表(2011年度は5兆9千億円、39.4%が未使用)、とりわけ除染費に関しては、「仮置場が確保できず」を理由に67.9%が未執行状態です。その事を如実に表わしたのが8/10の環境省の発表です。環境省直轄除染11市町村のうち、7町村について、来年3月完了計画を、「期限を明示せず延期する」と発表しました。7町村の7月末現在、実施状況(宅地)は、飯舘村3%、葛尾村2%、南相馬市(小高区、原町区1部)・川俣町・浪江町・双葉町・富岡町0%です。原発事故発生後2年半経過してこの体たらく。現在の除染計画の破綻を認め、まず住民の長期的生活再建に向けた政策を、今すぐ実施することを繰り返し訴えます。



## 第5期（第10次・11次）空間線量率測定結果（第3報）

池田 光司

先回、空間線量が下がってきている様子を、第1期(2011年6月)から第5期(2013年4月)までの測定データを用いて報告しました。第5期の報告としては今回は最後となりますが、汚染の分布の様子について報告します。

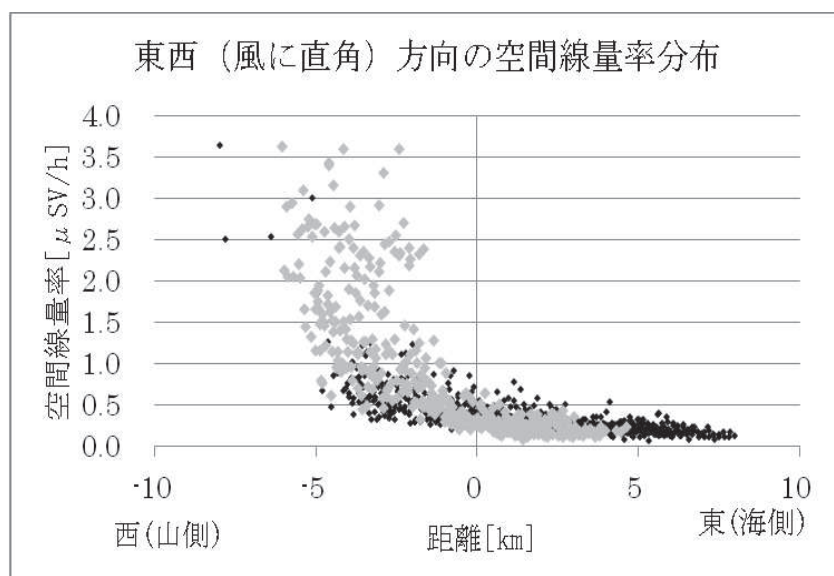


【図1】第1期と第5期との比較

【図1】は、原発事故直後の第1期と、約2年後の第5期の汚染の分布の様子を比べたものです。データは、鹿島区と原町区のもので、汚染は事故当時、飯舘村に向かう風(雲)に乗って広がりました。その方向と直角に交わる東西方向に、測定したデータをプロットしました。第1期、第5期ともに、空間線量率は、山側が高く、海側に向かって弧を描くように低くなっています。これは、汚染の程度が、原発からの距離よりも、雲に乗って汚染の広がった流れの帯と、どれだけ離れていたかによって決まることを示しています。また、第5期のデータは、第

1期の形を保ったまま全体的に低い方向に移ったように見えます。実際、第1期の一つひとつのデータを半分(正確には2.3分の1)にすると、形は第5期のグラフとピッタリと重なります。これは、山側も海側も同じような割合で空間線量率が下がっていることを示しています。細かく見ると、よく下がったところや逆に上がったところもありますが、全体的には、放射能は事故当時の汚染の分布をそのままに残しながら下がってきています。

【図2】は、第5期の鹿島区と原町区のデータに重ねるようにして、原発に近い小高区と浪江町の第5期のデータをプロットしたものです。グラフから同じような分布をしていることが分かります。ただし、この地区は山が海に近い分、山側の空間線量率の高いところが多くなっています。しかし、海側は、原発から離れた鹿島区や原町区とほとんど変わりません。「汚染は風に流される雲に乗って広がる。原発からの距離では決まらない」ということを、より強く証明するデータとなっています。



【図2】小高区と浪江町の分布

このように、空間線量率の測定は、私たちに貴重なデータを与えてくれています。第6期の測定がこの10月に行われます。「継続は力なり」、みなさまのご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

## 信州伊那谷 親子リフレッシュツアーを終えて

8月2日、3泊4日のリフレッシュツアーのボランティアを終え、手を振って送り出しバスが見えなくなる頃、涙がわ〜とあふれてきた。一緒に道まで出て手を振った友人も、同じように泣いていた。あんなにかわいい子ども達が、福島県南相馬市に帰り、少なくとも私の住む伊那市よりも放射線量の高い場所で毎日暮らすのかと思ったら、その理不尽さと、「どうか元気でいてね」という、祈るような思いでいっぱいになった。今年3月に、この会の代表となる原富男さん(チェルノブイリ救援・中部理事長)から、「伊那谷で福島の子どもの保養プロジェクトを立ち上げ、夏休みに実現したい」と相談があった。わずか5ヶ月足らずの準備期間。資金のことや思いの共有の部分で侃々諤々、開催直前の宿泊場所の変更など様々な困難を乗り越えて(笑)、最終的に延べ100名以上のボランティアスタッフ、必要経費をはるかに越える寄付をいただき、たくさんの方の思いと奇跡のような偶然が重なって、第1回リフレッシュツアーは無事終了した。そして、なにより「子ども達を何とかしたい」「汚染された地域のために何かしたい」という思いが、チェルノブイリ原発事故以来、ずっと活動し続ける原富男さんを突き動かし続けているのだなあと実感。交流会で参加者の方から「こんなすべて手作りの食事、初めてだった」とか、「楽しかった」「来てよかった」「また、来たい」などなど、うれしい感想をうかがう一方で、「地元では放射能の話はしにくい」「農業ができなくなった」など、いつまで続くかわからない南相馬の厳しい現状もお聞きした。滞在期間中、ほとんど話す事のなかった中学生の女の子が、私のミニライブのあと「何か泣きそうになった」と話かけてくれたり、中学生の男子とはメル友になり、今も部活の新人戦の日程など送ってくれている。お孫さんに付き添って参加されたおばあちゃんが、涙を流して喜んでくれたこと。様々な場面や表情が、リフレッシュツアーの次回開催への種火として、今も私の中で灯っている。(伊那市 海老原 よしえ)

\* \* \* \* \*

この夏、私たちは南相馬市の皆様と伊那市長谷において交流会を開催いたしました。3.11以後、各地で様々な福島との交流が行われてきており、集まってきたメンバーの何人かは経験した人もおりましたが、何も無いところからの出発で幾ばくかの不安を抱きながら何回も話し合いをもって、一人ひとりが持っている手法を生かし積み重ねてゆきました。資金はみんなで走り回りカンパ



の協力をお願いし、当日のボランティアも集まり始めていました。なかなか集まらなかった参加者も、南相馬市で市民とボランティア団体との仲介をしていた「南相馬こどものつばさ」との出会いで、19人の親子の方々が応募してきました。最後まで悩んだ宿泊場所も、長谷地区の皆様のご厚意で貸していただくことができました。この企画の目的は、「少しでも放射能が少ない自然の中でのんびりと過ごしてもらい、日常の緊張した気持ちを解放してもらえたら」というのが、共通の思いでした。その上に、それぞれが異なった思いをもっていたのではと思います。私は、チェルノブイリの事故当時、日本でも放射能による食品の汚染を経験しており、原発事故の恐ろしさは知っているつもりでした。しかし、今まで何をやってきたのかという悔悟の念を、今回の事故で改めて強くしました。今回参加してくれた子ども達は中学生が多かったのですが、馬に乗ったり、川に飛び込んだり、木工体験をしたり、そば打ちを地域のおばあちゃんたちから教えていただいたりして、楽しんでくれました。また、大人の方々とはいっしょに食事を作ったり、今の南相馬市の現状などをお聞きする機会もありました。専業農家の方は、「米を作ることができずに買って食べている」と話していましたし、「薬に頼らないと眠れなかったが、ここに来てからは久しぶりに眠ることができた」と喜んでいました。今後何年続くかわからない放射能との戦いに、ささやかなことではありますが、私たちができることを今後も続けてゆきたいと思います。

最後に、ポレーシェの読者の皆様にもご協力いただきましたことに、深く感謝申し上げます。(田中 道子)

## 未来ある子どもたちのために、来年も・・・ (小牧 崇)

まずはじめに、プロジェクトの成果を簡潔にまとめてあると思いますので、代表の原さんが協力団体に届けた礼状の一部を紹介します。



『・・・皆様のご協力が無事「ツアー」を終了することができました。参加人数は、南相馬市から子ども13名、大人6名、総勢19名となりました。今回の「ツアー」は、初めての試みであり無事終わることができるのか不安な時期もありました。資金もゼロからの出発でしたが、徐々にカンパ金を寄せてくださる方が増え、目標額の60万円を超える金額となりました。また施設、交通・・・などの協力は10団体、野菜などの協力は23名、イベント関係の協力者は17名となりました。ボランティアでの食事づくりや、子どもの相手、運搬などは延べ86名の方のご協力をいただきました。・・・お陰様で参加者からは「マスクを着けなくては外出できない日常を忘れることができた」とか、福島では「山野で遊ぶことができないが、伊那では自由に外遊びができた」といった感想をいただいております。

3泊4日という短いツアーでしたが、実りある交流と体験だったのではないかと思います。農業を営んでいる親からは、「20町歩の田んぼを持っているのに一粒の米も作れず、買っている」という話を伺いました。放射能汚染のある福島に子どもたちを戻す「つらさ」もあります。厳しい現実ではありますが、私たちは「未来ある子どもたち」のために来年も「伊那谷親子リフレッシュツアー」を継続したいと考えております。初めての取り組みの為、至らない点もあったかと思えます。

ご協力に感謝申し上げます、来年のご協力もお願いいたします。』

運営委員の初顔合わせは3月上旬。具体的に動き出したのは4月に入ってから。資金ゼロ。経験もなし。ないもの尽くしでしたから、集まった全員がプロジェクトの大切さは感じていたものの、自分たちが新たに取り組むことには躊躇する雰囲気、私自身も含め強かったと思います。「無事終わることができるのか不安な時期」は続きました。

4・5月、会場の確保、募集要項の作成など、バタバタと準備を進めましたが、はたして応募があるものか、お金が集まるものか見通しは立ちません。福島県の「南相馬こどものつばさ」と繋がりができ、ツアー参加者が集まる目途が立ったのが6月下旬。周囲の環境は素晴らしいが、施設にやや難ありだった会場についても、国道に近く真新しい公民館を借りられるようになったのは実施直前。すべてが奇跡的に良いほうに転んでいきました。

今考えると、時と人に恵まれたと思います。3月、松本で開かれた「子どもたちを放射能から守る信州ネットワーク」の発足イベント。伊那では、5月に地元市長も巻き込んだ3.11関連のシンポ、6月、小出さんの講演会、7月福島の農民を取り上げたドキュメンタリー映画の上映会と、関連するイベントが続き、地方紙やローカル紙に取り上げられたので、ごく一部ではありますが、福島支援は「今でしょ！」という雰囲気づくりにつながりました。運営委員の構成は、チェルノブイリ救援活動に取り組んできた年配者、6年前の「六ヶ所村ラブソディ」上映会を担った人を中心とする中堅、そして今回加わった若い子どもを持つ若手(被災地から伊那に移住してきた家族が多い)と、年齢層に広がりがありました。



それぞれ仕事を持ちながら、大事な時期には週一回の会議に必ず顔を揃えていました。こうした地域のつながりは大きな財産です。そして南相馬の人たちの生の声を聴き、交流が深まったことが良かった、今度は「南相馬ツアーもいいね」という声も上がっています。

## ————— 地球汚染の自覚を —————

福島第一原発の放射能汚染水問題が、にわかにくローズアップされている。しかし、この問題は事故直後から継続中であり、最近新たに起こったことではない。事故前から原発の敷地地下には毎日約 1,000 トンの地下水が流入しており、そのうち 400 トンが事故を起こした原発建屋に毎日流入している。さらに、今も炉心を冷やすために毎日 400 トンの冷却水が注入され、これがもれ出て地下水を汚染しているのである。東電は、この汚染水を汲み上げて、半分は冷却用に再利用し、残りは地上のタンクに貯蔵しているが、敷地がタンクで一杯になり、限界は近い。高レベル廃棄物処分問題も含めて、地下水は日本の原発のアキレス腱である。

### なぜ地下水が流入？

事故を起こした福島第一原発（以下、F1）に何故地下水が流入しているのか。理由は簡単。F1 は、山を削り川の流れを変えて整地した場所に作られたため、そもそも山からの地下水が原発の下を流って海につながっている。そのため、敷地の地下水位は、潮の満ち引きに伴う潮位と連動して変化しているらしい。

東電は、地盤が地下水で軟弱になるのを防ぐため、事故前から毎日 850 トンの地下水を汲み上げ、海に捨てていたようだ。原発の立地については、地震との関連でもっぱら活断層が問題にされるが、F1 はそもそも地下水位の高い軟弱地盤上に建てられたものだった。もし、炉心のメルトダウンとメルトスルーが起こらなければ、こうした問題は表に出なかったかもしれない。水の豊かな日本に原発を作る危険性の新たな問題である。東電は、汚染した地下水を汲み上げ、1,000 トン入るタンクに貯蔵していたが、急場しのぎのために作られたタンクは、ゴムパッキンを挟んだ金属板をボルトで締めただけのもので、何もなくても寿命は 5 年である。

震災後頻発する余震などで、継ぎ目が壊れるなどの事故は自明である。さらに、こうしたタンク群は、原発の下を流れる地下水の上流側（山側）に作られたため、壊れたタンクからの汚染水が地下水に流入したのが、最近の事故である。

### ロンドン条約違反

世界で核兵器や原発が開発された 1940 年代当時から、放射性廃棄物は悩みの種であった。再処理施設や研究所などの放射性廃棄物は、ドラム缶に詰められ大量に海洋投棄され、世界の

海を汚染した。その他、工業化に伴って大量に出る産業廃棄物なども海を汚染したため、国連では 1975 年に「ロンドン条約」を作り、世界的な規制を始めた。日本も、かつては放射性廃棄物を海に捨てていたが、1980 年にロンドン条約に加盟・批准した。

放射性廃棄物については、1993 年に低レベル・高レベルとも海洋投棄は全面禁止された。それまでに世界中で海に捨てられた放射能の総量は、 $85 \times 10^{15}$  Bq である。一方、F1 からこれまで海に流された放射能の量は、 $50 \sim 60 \times 10^{15}$  Bq と見られている。

これが、IAEA が汚染水事故を原発自体の事故と切り離し、レベル 3 と認定した根拠である。即ち、F1 から海に流れた放射能は、世界中の国々が過去に海に投棄した量に迫っているのである。これは、明らかにロンドン条約違反である。もっとも、東電や政府は「意図的に流したわけではない」とか「船からドラム缶で捨てたわけではない」などと、言い訳をしているようだ。

チェルノブイリ原発事故の収束に当たったベラルーシの責任者は、F1 の汚染水問題を「明らかな犯罪だ」と糾弾している。「F1 は地球汚染をもたらしている」という自覚が、我々日本人には必要である。

### 高レベル廃棄物処分は危険

事故がなくても、いずれ放射能と地下水の問題は噴出するはずだった。いたるところで地下水が湧き出る日本で、10 万年間安全に高レベル廃棄物を地層処分できる場所などない。F1 事故は、この問題を一足早く見せてくれたに過ぎないのである。（河田）



## 「一番最後に死ぬのは希望」 9月 スタディ・ツアー参加報告

暑い日本を出発し、雨の少ないというウクライナに到着しましたが、滞在中は110年ぶりという雨ばかりでした。さて、心に残ったことを書かせていただきます。まず、チェルノブイリ担当のナロジチ地区副行政長と会見。最後にこの地方の言葉を教えてくださいました。『一番最後に死ぬのは希望』次はナロジチのおひさま幼稚園視察。かわいい子ども達が出迎えてくれました。園長先生の言葉『福島の事故が起きた時、自分のことのように他の先生たちと泣きました。』これを聞いて南相馬から参加したご夫婦が、こらえきれずに泣いておられました。

次に向かったのはナロジチ地区中央病院。最後に内科医の副院長への質問。「夢はなんですか？」『診るべき患者が1人もいなくなる。』翌日は、ジトーミル州立小児病院見学。マルチェンコ院長の福島へのアドバイスをお聞きしたところ、「私にはわからない」と言われました。誠実さを感じました。しかし、いくつかの注意事項の助言をいただきました。先生自身も当時被災され、仕事のため『嫌がる子どもを1人で遠距離に避難させた。当時はとても辛かったが、今は良かったと思っている。』とのことでした。そしてゼムリヤキを訪問。チェルノブイリ原発従事者のために作られた、プリピャチ市から移住させられた人たちの基金です。「福島の被災者は、これからどうやって生きていけば良いか？」という質問に『毎日、時間通りに体操したり、忙しくした方がよい。戦うべき、生きるべき…。』

まだまだ、お伝えしたいことは山ほどありますが、大切なのは自分の目で見、聴き、感じるのだと思いました。チェルノブイリ原発にも近くまで行き圧倒されましたが、ただ建物を見るだけでは成果は少ないでしょう。そういう意味で、人間同士のつながりを築いてこられた、チェルノブイリ救援・中部の23年間の活動に対し、敬意と感謝を捧げます。(新米ボラ 上田 千津子)

\* \* \* \* \*

スタディ・ツアーに参加させていただき、本当にありがとうございました。チェルノブイリ救援・中部の長年にわたる支援活動が重要な役割を果たし、いかに多くの勇気や力を生んできたかをしっかり確認させていただきました。今回学ばせていただいた通り、日本国内においても体調異常の増加は認識されつつあるものの、個別での原発事故の影響であるか否かの判断は、難しいことが事実となっています。最近も、「事故から数日間、数キロエリアで川の水を使って炊事していた方が、影響がないと思われる地域へ避難したものの、抵抗力が落ちる、肺に水が溜まるなどの症状が続いた末に、多臓器不全で亡くなった。」という事実を耳にしました。死因は、「原発との関連はない」との判断だったようですが、真実はどうなのか分からないというのが本当のところだと思います。



バンダジェフスキー氏やジトーミル州立小児病院のドクター、ゼムリヤキの皆さんなどの話を基にすると、日本の現状は…

- 多くの方が、いまだに放射能の恐ろしさを知らない上に、「問題を早く終息させたい」「人体への影響も少なかったことにしたい」のではないかとと思われる事象も見られる。
- このためか、外部及び内部被曝した危険性があると思われる方（自主避難された方を含む）の「全世代モニタリング」を行うことが必要であるのに、現在は行われていない。（検査をしても、数値を教えてくれない所も…）
- このまま何も対策を講じなければ、数年後には多くの方が、甲状腺や心臓・肺などに深刻な症状が出るのではないかと懸念される。
- 福島原発事故によって影響のあるエリアだけではなく、他地域においても「放射能による人体への影響に関する知識の啓発」「被曝が疑われる方のモニタリングシステムの確立」が喫緊の課題となっている。…という由々しき状況であると考えられます。将来にわたる影響を少しでも減らすため、学んだことを活かして頑張ります。今後ともよろしくお願いします。(岐阜県議 川上哲也)

## 講座に初参加して

名古屋 NGO センター  
国際理解・開発教育委員会  
三浦 奈苗

今回、9月1日に開催された『チェルノブイリ/フクシマ講座第5回トークカフェ～あなたならどうする!?～』に、講座冒頭のアイスブレイクを担当するという立場で、初参加させていた



< 軽妙に語る伊藤さん(中央)と三浦さん(右) >

だきました。和やかであたたかな雰囲気フェアトレードカフェを会場に、参加者もスタッフ含め16名までの少人数設定で、終始アットホームな楽しい空気感の中、進められました。

テーマは『被災地の若者が突きつけられた困難な選択の連続。あなたならどうする?』。福島原発事故後、勤めていた東京の会社を辞めて故郷の南相馬に戻り、友人とともに復興のためのNPO法人『フロンティア南相馬』を立ち上げた伊藤さんが、この2年半をどのように過ごし、こういった場面で選択を迫られ、そして選んできたのか…。終わりの見えない原発事故といった、重く厳しいフクシマの現状を、わかりやすく軽快な口調で、参加者に問いかけ巻き込みながら、かなり赤裸々に(笑)お話しいただきました。

笑いあり、しかし涙しそうな場面もありの、とても楽しく心動かされることのない時間でした。中でも印象的だったのが、福島の漁港でちょうど2日前に聞いたというお話。水揚げされた魚を測定する際、「3度洗って内臓を出し、その後で計っている」のだそうです。それでも数値の高いものは棄ててしまって、基準内に入るものだけを報告する…。

また、福島の漁港では漁ができないのですが、そこへ他県から船がやってきて魚を獲り、自分たちの港へ持ち帰ってそして水揚げをする。そうすると、産地には水揚げされた漁港の名前が記載されるのだそうです。そしてそれは一般に広く流通している…。

ニュースや新聞では報道されない生の声やお話を聞き、福島県の状況は本当に厳しく、復興の道は長く困難な道のりなのだ、と感じました。それとともに、こうしてフクシマと向き合い活動を続ける伊藤さんの想いに触れ、これまで以上にフクシマ問題を、南相馬を、身近に感じられるようになりました。

「あなたならどうする?」伊藤さんの問いかけです。

わたしは、「わたしにもできることを。そして、フクシマをずっと見つめていこう。」と思ったのでした。

次回の**チェルノブイリ/フクシマ講座(第6回)**のテーマは、福島県の豊かな自然や文化、そして歴史・風土などのお話です。また、現在愛知県には約1,200人の方が避難されています。愛知県被災者支援センターの方より、「**被災者(避難者)の方々の今**」をお聞きます。

日時 12月1日(日) 午後1時30分～4時

場所 ウィルあいち 1F 視聴覚ルームにて

地下鉄「市役所」駅下車 ②番出口より 東へ徒歩約10分

参加費 500円(お茶菓子つき)

## 「ナロジチ地区復興のナタネ」 勧告書の日本語版に寄せて (河田 昌東)



福島の農業再生を願って…  
(500 円/冊)

2007 年から始まった、ウクライナ国ジトミール州ナロジチ地区における「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」の 5 年間の研究成果をまとめ、ウクライナ政府に提出した勧告書です。この研究を精力的に行い、勧告書を作成した「国立ジトミール農業生態学大学の M. ディードフ准教授」はじめ、多くの研究者の皆さんに改めて感謝します。彼らの協力がなければ、チェルノブイリ原発事故による放射能汚染地域の復興への道のりは、さらに遠くはなされたはずで

す。救援・中部は、1990 年に発足以来、ジトミール州の被災者の救援に当たってきました。国内の多くの支援者や各種の助成金などのおかげで、現地からの要請による、様々な医薬品や医療機器を数多く提供し、病院における治療成績も上がりました。

しかし、その一方で、ウクライナで最も放射能汚染の影響が大きいナロジチ地区（原発から 70Km）では、相変わらず様々な病気の発生が止まらず、「医療支援」と「病気の増大」というジレンマが私たちを襲いました。

原因は「内部被曝」でした。この村で採れる野菜や肉類・きのこ等、住民の食べ物は事故から 15 年経っても汚染がひどく、住民の肉体を蝕んでいました。事故直後、この村は放射線管理区域に相当する  $5\text{mSv}/\text{y}$  を越える被曝が見込まれ、3 万人の住民は全て義務的避難対象となりました。しかし、2 万人が国費で避難した頃、独立したウクライナは経済が破綻し、残った住民の国費による避難計画は放棄され、住民は汚染地域での自給自足を余儀なくされたのでした。

内部被曝の防止は喫緊の課題でした。様々な調査研究を重ね、植物による除染（ファイトレメディエーション）という方法に辿り着きました。

様々な植物の中からセシウムの吸収力が高いナタネを選び、除染をかねたバイオエネルギーの生産で、ナロジチ地区の復興を目指すことにしました。5 年計画は必ずしも順調ではなく、民族や歴史の異なる人々との共同作業の難しさを感じることも少なくありませんでしたが、農業生態学大学の研究者らの真摯な研究が計画を実現させました。

この計画が可能になったのは、救援・中部のメンバーらがチェルノブイリ原発事故のあとに長野県伊那市で始めた地域エネルギー自給運動があったからです。彼らの経験を生かし、ナタネ油はバイオディーゼル燃料に転換し、残ったバイオマスはバイオガスとして利用できることが予見されたのです。

計画をウクライナ側に提案し、各種の分析や現地での栽培指導には農業生態学大学が当たることになり、2007 年 6 月には広大な荒地となっていた汚染地（スータルシャルノ村）に初めて美しい菜の花畑が現出しました。以来 5 年間、多くの困難と闘いながら実行した「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」の詳細は本書に述べられています。

5 年間の実験の結果、土壌汚染の低減は、当初思い描いたほどではないことが明らかになり、一時は悲観的になりました。ナタネは連作障害があり、毎年同じ畑で栽培はできず、次の 3 年間はライ麦などの裏作を行う必要がある。しかし、そのことが新たな発見に繋がり展望を開きました。ナタネは汚染するものの裏作作物は汚染が低く、食用や家畜飼料にできるのです。実験室での栽培試験ではできない試みでした。

この成果をジトミール州政府が取り上げ、2013 年秋から 500ha に及ぶ汚染大地でナタネ栽培とバイオエネルギー生産によるナロジチ復興計画を打ち出しました。

ナロジチ地区には約 1 万 ha に及ぶ耕作放棄地があり、順次規模を拡大して行く計画です。

このプロジェクトが終わりを告げようとした矢先の 2011 年 3 月に、東日本大震災に伴う福島第一原発の爆発と広範囲の放射能汚染が起きました。皮肉なことにウクライナでのこれまでの経験が福島の復興に少しでも役立てば…という思いで、この勧告書の日本語版を出版することにしました。

## 事務局便り

ウクライナでは、ホステージ基金のキリチャンスキーさんが亡くなった後、ドンチェヴァさんが1人で基金を切り盛りしている。そんな折、日本から支援金の外貨送金受取の際、書類提出手続きに変更が発生し、彼女は受取人登録から始めなければならない状況に立たされた。管轄官庁の変更で、より手続きが煩雑になり、今まで築いてきたやり方では支援金を受け取れなくなったという。いかにも、手数料ばかり払うように仕掛けられていて、前近代的でやたら煩雑、意味不明なウクライナ流議だ。ドンチェヴァさんは腹立たしさを飲み込みつつ、このばかげた手続きを何とかクリアしようと奮闘している。

南相馬では、いよいよ本格的に、志あるグループと生産者そしてチェル救による「菜の花プロジェクト」が開始された。このポレーシェが皆さんの手元に届く頃、秋播きナタネの播種が行われていることだろう。ウクライナで展開した菜の花プロジェクトが、いよいよ南相馬でも展開するのだ。希望の菜の花となるか！ そうそう、来年の収穫期にコンバイン（刈り取り脱穀機）が必要だ。

だが、今のところメドがついていない。走りながら考えるチェル救らしいのだが、コンバインを何とかしなければ！ **「コンバインキャンペーン」も始動。乞うご寄付！ ご支援を！** (山盛)

☆**ご寄附の報告**☆ 総額：64件 776,677円 (8月～9月20日)

私たちの活動は皆様のご寄付によって支えられています！

●ミルクキャンペーン	18,000円	ウクライナへ贈るミルク代に充てます。
●被災者支援(ウクライナ)	9,000円	ウクライナの被災者が使う医薬品代に。
●菜の花プロジェクト	8,000円	菜の花プロジェクトに。
●福島原発被災支援	15,500円	福島での活動費やとどけ鳥の支援に。
●指定なし(一般寄付)	726,177円	団体の活動費や運営費に充てられます。
●賛助会員費(議決権なし)	51,000円	
●正会員費(議決権あり)	9,000円	

## ☆支援者からの声☆

\*救援・中部の皆様、河田先生にはいつも本当にありがとうございます。菜の花プロジェクトの成功を祈ってます！（兵庫県加古郡） \*東電、政府のノロノロぶりはどうしようもないです。（茨城県笠間市） \*暑い中大変かと思いますが、体に気を付けて頑張ってください。少額ですが何かのお役に立ててください。（日進市） \*安藤さんの記事が心に残りました。（長野市） \*会報読んで、なんだか泣けました。素晴らしい活動を応援しています。（名古屋市） \*福島を支援を息長くお願いいたします。（東京都台東区） \*ご活動に感謝です。よろしくお願いいたします。（豊明市）

## 編集後記

☆「半沢直樹」を見て思ったこと。遅い帰宅の食事の後片付けを自分でする夫、来客にお茶を出す男性行員、日本もかなり変わってきました。ドラマの中だけのことでも良い兆しです。（佳）  
☆団体旅行って苦手だけど、チェル救のスタツアは別！ 関心事は同じ、志も同じ、目的（食べたり飲んだりだけじゃないよ）が同じ。なによりもチェル救の活動を紹介できる！素晴らしい。（美）  
☆「人はなぜ戦争をするのか？」 その答えは簡単、「人をだまし、戦争をけしかける犯人がいるから」である。「9.11」「3.11」「シリア」「ボストン」…など、「実は全部『内部犯行（自作自演）』である」と気づいたペンタゴンの良識派が、「もう戦争は終わりだ」と言っている。世界平和は近い。あとは、貧困・飢餓を生み出している「金融のからくり（詐欺）」にNO！を突きつけることだ。（J）

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473